村山民俗学会

第418号
発行日　2026年8月1日
発行責任者　相原　一士
編集担当　岩鼻 通明

出羽国内陸地方における初期浄土真宗の動き―長井門徒―（3）

村山　正市

彼らは「鹿島門徒」で常陸鹿島と出羽長井と、どこに接点があるのか、おそらく茨木県笠間市稲田草庵西念寺との関係であろうと考えられる。鎌倉幕府の政所大江広元の次男、長井荘地頭長井時広（大江氏）と宇都宮氏、鹿島氏との間に親密な関係があったと考えられる。米沢市成島八幡神社は、宇佐八幡宮の分霊を勧請したと伝えたれ、鎌倉鶴ケ岡八幡神社との関係があり、正安２年（1300）に長井荘（置賜地方）の地頭・長井宗秀によって宝殿などが修理された棟札が残されている。細川行信氏の『真宗成立史の研究』（法蔵館）によれば信海は鹿島神宮の祢宜の一族であったとしている。大石直正氏は『岩波講座日本通史』第７巻「地域性と交通」で勧進聖としての教線拡大を指摘している。

しかし、康永３年（1344）以降、史料からも伝説からも姿を消し、彼らの遺跡も不明である。なぜ、出羽から京都まで上洛して勢力を持ち、本願寺との深いかかわりがありながらと絶えたのには、何かの理由があったのだろう。もしかすると、出羽国では善光寺信仰が布教されたところに、浄土宗鎮西派（分派した旧時宗一向派）の流れを汲む一向上人の弟子行蓮などによる南無阿弥陀仏の浄土信仰に吸収されていったことも想定される。旧時宗一向派寺院の阿弥陀如来など三尊が善光寺式三尊であることからも伺われる。それは、天童市大清水高野坊遺跡から出土した墨書礫に、応長元年（1311）霜月に行蓮が勧進聖として、地元の有力者の支援を受け、一向上人の法要が行われたことは、地域にも浸透したことが想定される。また、この時期に一向上人ゆかりの時衆の道場が、川西町、村山地域に広く営まれていたことからである。

それが、室町時代になるとその基盤を有効に布教したのが、蓮如上人の直弟子たちである菅生願正上人などが浄土真宗の教えを定着させたことも想定される。

参考文献：　梅原眞隆著『覺如上人の傳統』顕眞学苑　1931年
栗原行信「源空の浄土回収と門下の分流」大谷大學研究年報24　1972年
若林 眞人「存覚上人『袖日記』による門徒系譜について」行信学報 2003年
茨城県立博物館「特別展　親鸞―茨城滞在20年の軌跡」2010年2月